

## 車田忠継著 『昭和戦前期の選挙システム』

### ―千葉県第一区と川島正次郎―

杉谷 直哉

本書は、千葉県出身の政党政治家である川島正次郎と川島が関わった衆議院議員総選挙及び県議会議員選挙を対象にし、千葉県の地域政治構造と戦前から戦後にかけての選挙の特質を描き出したものである。以下、本書の内容を要約するとともに、若干のコメントを付け加えたい。

「はじめに」で著者は本書の根底を成すテーマとして選挙システム の概念を次のように規定する。

まず候補者は選挙区で県会議員などの地方議員と関係を構築するとともに、選挙区で政治活動を重ね、やがて立候補する。そして選挙運動を経 過、選挙結果が導き出される。ここで候補者は選挙結果にもとづき、選 挙費用、地域ごとの得票数（得票率）、選挙違反などを把握し、それらに 規定される形で、再び県会議員選挙との関係を構築し、政治活動に励み、 次回の選挙に向かう。この循環こそ、筆者の考える選挙システムに他な らない（一頁―二頁）。

この選挙システムの概念規定は、継続して特定の選挙区から立候補

して当選を重ねる政治家のあり方を示したものと、重要なものであると思われる。さらに著者は本書における方法論として次の五点を挙げている。

- ①「一つの選挙区と一人の代議士を結び付け」、一九二四年から一九四二年までの衆議院議員総選挙を分析する（九頁）。
- ②川島の選挙や政治活動の形態変化を分析する（同上）。
- ③川島と選挙を戦った対立候補を比較的に分析する（同上）。
- ④代議士の後援会が組織される背景などから後援会の基礎構造を分 析・検討する（一〇頁）。
- ⑤「川島の選挙システムの分析結果を支持基盤の視点からまとめ、特 定化する」（同上）。

この選挙システムと五つの方法論を元に著者は本論を展開してい く。

第一章「代議士への道―一九二四年の二つの選挙」では、まず川島 の地盤となる千葉県第一区のうち、東葛飾郡の特徴を次のように指摘 する。即ち、東葛飾郡は農村地帯に加えて工業地帯、漁村地帯などの 多様な地域から構成されており、一九三〇年代には都市化が進展した とする（二二頁―三五頁）。まさに東葛飾郡は、多様な利益要求が潜在 するつぼのような地域であったと言えよう。著者によれば、当選を 目指す代議士たちは、県会議員の選挙に積極的に介入し、自らの影響 力を浸潤させていったとする。その代表的な事例として、実業家で政 友会所属の本多貞次郎を挙げている。本多は来る選挙を見据えて、自 派の人物を県会に送り込む動きを展開する。これに対して川島は、第

一五回衆議院議員総選挙に憲政会系候補として立候補するが本多に敗れている。しかし、川島は「落選したものの」、「地域有力者、母校専修大学で築いた人的ネットワーク、青年団、労働組合、市場関係団体などを支持基盤とし」、「次回総選挙につなげた」とする(四五頁)。そして「川島が政治の目的を生活の改善(向上)として捉え、両者を結んだとし」、「経済格差が大きい東葛郡郡という選挙区だからこそ、この川島の政治信条は」広く受け入れられていったと評価する(同上)。川島は最初の選挙で敗れこしたものの、多様な要求を有する選挙区の中で自らの支持基盤を固めることに成功した。注目されるのは、川島が地域の名望家層だけでなく、青年団を支持基盤としていた点である。青年団の中に反政友会的傾向があったことが、憲政会系として立候補した川島を支持した理由であるとしている(三六頁)。初めて立候補した川島にとっては、心強い味方であっただろう。このことは、現状改革の要望を川島が汲み取り、生活改善を政治のスローガンに掲げたこととも関連すると考えられる。

第二章『「二大選挙」―代議士川島正次郎の誕生』では、一九二八年の県会議員選挙と第一六回衆議院議員総選挙を対象とし、川島が当選に至る過程を検討している。一九二八年に行われた県議選で川島は自派の人物を県議に当選させることはできなかった(六一頁)。ただし、川島系の候補者がいずれも三〇代であることから、青年団の応援を引き続き受けていたと著者は指摘している(同上)。このように不利な状況下にあった川島だが、転機となったのが政友会への入党である。これは、先述の本多が政友本党を経て民政党に入党したことによる。

著者によれば川島の政友会入党は政策的な理由ではなく本多との「対人関係」によつていたという(六二頁)。注目されるのが選挙戦で川島が「政党员個人の倫理観や道徳性の『改造』を有権者に訴えていた」点である(六八頁)。こうした戦略は川島のイメージ戦略の一環として位置付けられる。その他、注目される点として「政党支部は代議士と県会議員の連合体に過ぎず、候補者の選定や調整を担えなかった」との指摘がある(七九頁)。また、演説会が頻繁に開催されたことや、「日本中の一人も食ふに困るもののない様にする」という政治信条を掲げたことが有権者に支持された点、地方議員による買収が横行した点、名望家層や専修大学関係者、青年層が引き続き支持した一方、前回の選挙で活動していた市場関係者や労働組合が選挙運動に参加していない点などを指摘している(七八頁―八一頁)。川島は男子普通選挙という全く新しい政治情勢に対応しうる地盤と選挙態勢を整えていったと言えよう。

第三章「政党政治期」では、政党政治期における川島の選挙区での議員活動が分析されている。川島は他の候補者と比べても、積極的に議会報告演説会を開催しており、自らの成果を有権者にアピールしようとしていた(九〇頁―九二頁)。民政党を与党とする浜口雄幸内閣下で執行された、一九三〇年の第一七回衆議院議員総選挙における川島の立候補過程の特徴について、著者は「地域有力者の推薦会やボトムアップ」を経ずに立候補しており、党組織などの支援はなかったとする(九四頁)。川島は、専修大学の人脈を活かした学生弁士の動員や、推薦状などの選挙メディアを駆使した選挙戦を展開した(九七頁

一九八頁)。この選挙では民政党から政友会に移った本多が落選するなど、全国的な政友会の敗北を反映した結果となった(二〇二頁)。その後、川島は一九三二年の県議選に向けて、選挙区内での議会報告演説会を開催するなどして政治活動を展開し、自派の県議を当選させる道筋をつけた(一〇七頁―一六六頁)。政友会と与党とする犬養毅内閣が執行した第一八回衆議院議員総選挙では、これまでの選挙に続いて県議が代議士の集票回路として機能したことで、川島が政友会本部主導の候補者擁立に反対したことから、「候補者選定に関しては、特に本部や支部の影響力は限定的」であったことなどを特徴として挙げている(一一七頁―一二〇頁)。選挙の結果、千葉県第一区の全四議席のうち、政友会が三議席を占める結果となり、川島も当選を果たした。著者の指摘の中で重要なのは、村レベルでの得票数の偏りが見られる点である(一二七頁―一二八頁)。政党政治期の選挙の分析結果について、著者は川島が議会報告演説会を開催して、有権者と意識的につながりを保ち続けたこと、党の本部・支部の後援を得ずに立候補し、着実に当選を積み重ねて政界での存在感を増したことで、市場関係団体を支持基盤に組み入れたこと、県支部の影響力は小さく「依然として代議士が選挙の主導権を握っていた」ことを特徴としてまとめている(一三二頁―一三三頁)。

第四章「代議士後援会の誕生」では、戦前から形成された代議士の個人後援会に焦点を当てている。後援会の特徴として著者は次の五点を挙げている。

① 政党内閣期に成立したものが多く、「候補者の出生地とその周辺、

地盤地域とその周辺に町村単位で設立された」。

② 「政党本部への公認申請、選挙運動、演説会の開催、候補者擁立、県会議員選挙への関与」などを展開した。

③ 「地域利益や支持者の団結などを通して、候補者個人と有権者を架橋した」。

④ 普通選挙と中選挙区制という「新たな政治環境」に対する「万能の処方箋ではな」かった。

⑤ 戦前と戦後の連続性は薄いが「決して戦後政治史の産物ではなかった」(以上、一四五頁―一四六頁)。

著者が対象とする千葉県第一区の場合、川島以外の候補者の後援会は、「制限選挙期の政治団体が後援会に変質したものではなく」、候補者を「代議士へと押し出すため、新たに結成された組織であり(二五三頁)、運営には地方議員など地域の有力者が関わっていた(二五四頁―一五五頁)。また、報道などで表立った活動は見られず、『見えない選挙運動』に従事し、戸別訪問などの違法行為の主体として機能していた」点も、特徴として指摘している(一六〇頁)。

川島の後援会については、他の候補者の後援会と比較して結成が遅かったとし、地盤外である君津郡と千葉郡で後援会を結成したが、「支持基盤の主力ではな」く、違法行為を含めた『見えない』活動を続けていたとする(一六二頁―一六八頁)。このように千葉県第一区における後援会の影響力は限定的であったと著者は結論づける。

第五章「肅正選挙期」では一九三六年から三七年にかけて実施された衆議院議員総選挙および県議会議員選挙の分析を行っている。この

間川島は、専修大学弁論部の支持を失い、疑獄事件に巻き込まれるなど、苦難の道を行んでいくこととなる（二七六頁―二七七頁）。このような中で、一九三六年の県議選では代議士が自派の県議を擁立したが、民政党千葉支部による候補者選定の関与を著者は「特筆に値する」と指摘する（二八〇頁―二八二頁）。今まで存在感がほとんどなかった政党支部が存在感を示し始めたのである。県議選の結果、民政党候補が躍進した一方、政友会の本多は自派の領袖であった床次竹二郎の死去などもあつて影響力が低下し、系列下の県議は五名中四名が落選する結果となった（二八二頁）。中央政界における存在感の低下が地方

政界にも波及したのである。同年に実施された第一九回衆議院議員総選挙では、選挙公報の検討を通して、川島のそれが「抽象的ながらも簡単で」あり「有権者の生活と政治を直結させたことが特徴であった」としている（一八七頁―一八八頁）。選挙の結果、川島は三位当選を果たした一方、政友会から立候補して落選したある候補者は、選挙違反の容疑をかけられ、逃亡劇の末逮捕される事態となった（一九七頁）。粛正選挙における取締強化を示す一例と言えよう。なお、この選挙でも引き続き村レベルでの得票率の開きが見られる点が注目される（一九三頁―一九五頁）。次に第二〇回衆議院議員総選挙では支部が主導して擁立した候補者が落選したことが重要であろう。この点について、著者は「県支部主導で擁立した候補者の落選は、千葉県第一区の有権者、特に東葛飾郡の有権者の投票基準が政党よりも候補者個人にあつた証左ではないだろうか」と推察している（二二三頁）。そして、粛正選挙期の特徴として、①立候補が候補者主体であり、政党組織の

影響力が限定的であつた点、②地方議員による買収が横行した点、③川島の場合、市場団体関係の支持が無くなり、後援会の機能不全など支持基盤の変容が見られた点を指摘している（二二八頁）。

第六章「翼賛選挙の時代」では、川島が政治家としていくつかの重要な転機を迎えたことが指摘されている。一九三八年の政友会の千葉県支部長に就任と（二三一頁―二三三頁）、一九三九年に政友会がいわゆる中島派と久原派に分裂した時に、中島派の総務に就任したことである（二四〇頁―二四四頁）。川島は当選五回を重ねる中で、政友会の重鎮としての地位を確立しつつあつた。このことは戦後自民党で幹事長に就任するキャリアの前提として重要であろう。

一九四二年の翼賛選挙では、候補者詮衡会が大政翼賛会の推薦と非推薦の候補者の選定を主導し、川島は非推薦候補として立候補した（二五四頁）。この背景について著者は「翼賛選挙での推薦と非推薦の分水嶺が極めて曖昧で、しかも候補者自身の人間関係に左右されていた」としている（二五六頁―二五七頁）。そして、支持基盤は地域有力者を中心とした集票回路に加え、出身地の行徳町、漁業関係者に収斂したという（二六八頁）。結果的に川島は当選を果たし、戦後に至ることとなる。

補論「戦後政治史への道」では、川島が公職追放された中で身代わり候補を擁立し、やがて政界復帰を果たして自民党の有力政治家として台頭する前提を準備したことが指摘されている。

終章では本書での論点がまとめられている。即ち、川島は「地元選挙区への利益誘導の媒介者として実績を積み重ね」、「政治活動と選挙



運動を連動・一致させ」ていった。そして、メディアを駆使した選挙戦術を展開して、多くの有権者の耳目を惹きつけた。更に「常に川島を支持して投票する有権者がいる町村」を確保していったのである(二二二頁―二三三頁)。こうして川島は戦後に自民党政治家として、その存在感を発揮していくこととなる。

以上、紙幅の都合もあり部分的ではあるが本書の内容を要約した。次に本書の意義について述べたい。まず、重要なのは一貫して一人の代議士を戦前から戦後まで取り上げた点と、選挙を分析の中心に据えることで、その政治家の支持基盤と地域政治構造を明確に描いた点である。著者が指摘するように、川島をめぐる日記や書簡は現存しておらず、いわゆる一次史料には乏しい状況にある(二〇頁)。しかし、著者は整理された既存の史料や新聞史料を丹念に調査することで、この課題をクリアした。政治家研究や地域史研究において、史料制約は抜きがたい課題として横たわっている。史料保存の動きは近年急速に進展しつつあるものの、特定のテーマを描こうとする上で、新史料を調査・整理して研究に繋げるのは容易ではない<sup>1)</sup>。そのような中で、著者の示した研究方法は、たとえ一次史料が不十分であっても、既存の史料と新聞を駆使することで地域政治史研究の遂行が可能であることの意味している。今後の地域史研究の進展に大きく寄与することは間違いないだろう。

次に「選挙システム」という概念規定について言及したい。本書では単に選挙結果を羅列するだけでなく、「選挙システム」という概念規定を軸に据えたことで、より明確に地域政治構造を描き出すことに

成功した。重要なのは、どの選挙においても、事前となる県議選の存在を著者が重視している点である。政党による地方議員を通じた集票ルートの存在はかねてから指摘されているが、著者は県議選を衆議院議員選挙と連結させて叙述することで、川島が地域への影響力を高めていった過程を描いたのである。こうした分析は政治家と選挙区を考える上で今後欠かせない視点となろう。

このように著者の研究は、新たに明らかにした事実だけでなく、その研究方法と分析方法が特筆すべき点であると言えよう。

次に本書についていくつかコメントを加えたい。一点目は政党の地方組織の問題についてである。著者は政党の地方組織の役割は限定的であったと述べている。評者は島根県の憲政会・民政党勢力について検討したことがあるが、島根県では政党の郡支部発会式と政治家の後援会の郡部会発会式が並行して行われていた。島根県の場合は、首相経験者である若槻礼次郎をはじめ大臣に就任することとなる櫻内幸雄、島田敏雄、俵孫一など有力政治家が集中する地域であったことも関係していると思われる。著者は多くの研究が「代議士個人の選挙システムを政党の地盤として読み替えてしまったのではないだろうか」(三三三頁)と指摘しているが、島根県の事例を踏まえれば、そもそも当時の有権者や政治家にとって、政党の地方組織と後援会の区分は決して自明のものではなかったと考えるのが妥当だろう。また、島根県の場合は一九二〇年に結成された若槻礼次郎の後援会である克堂会の活動が特筆すべきであるが、貴族院議員であった若槻の後援会は後援会の中では特殊な事例に分類されよう。著者も比較史的な検討を試み

ているが(三二六頁―三三〇頁)、今後は事例研究の蓄積の上に、政党組織や後援会を類型化していくことで戦後の日本政治をも射程に入れた政治史研究が可能となるのではないだろうか。

二点目は村レベルで投票行動が規定されていたことである。なぜ、その村(あるいは町)がその候補者に投票したのか。この点については著者が町内会・部落会の検討を課題として挙げているが(三三三頁)、村レベルの投票行動の背景を考える上で重要なのが部落選挙の実態である。庄司俊作氏によれば、村議会議員選挙において、各部落から代表としての村議を選出することによって村内の対立緩和が進行したという<sup>(5)</sup>。このような調整が村レベルで図られていたことは、選挙における投票行動の前提になったのではないか。即ち、一貫してある候補者を支援し続けた町村では、町内会・部落会レベルで投票行動が調整されていた可能性が高いと考えられる。

また、評者が研究対象としている島根県では、憲政会と政友本党の合同に際して、八束郡政友本党熊野村部会が民政党への参加を決めている<sup>(6)</sup>。

恐らく、村レベルでは部落会や政党の部会が、有権者の投票行動を規定していたものと推察される。史的制約が大きいものの、村レベルでの投票行動の規定が、政治家の地盤として機能していた事実は、村の政治構造の検討の必要性を示していると考えられる。

三点目は地方紙の問題である。著者は新聞史料を多用している。戦前の地方紙の多くが、政党の機関誌的役割を果たしていたことはよく知られている<sup>(7)</sup>。地方紙は社説で政党の政策を訴えて支持基盤の拡大を

図り、更には政党政治家のイメージ形成にも貢献した。島根県の場合は、若槻の教育的規範としてのイメージ形成に地方紙が大きな役割を果たしていた<sup>(8)</sup>。残念ながら、本書では千葉県の地方紙の政党政派に関する記述は見られなかった。しかし、地方紙の発信する政治家のイメージ形成や報道姿勢は政党の支持基盤や地域政治構造にも小さくない影響を与えていたはずである。今後著者には地方紙と政党の関係についても検討していただきたい。

以上、いくつか拙いながらコメントを加えた。内容要約が不十分であったかもしれないが、それはひとえに評者の能力不足に起因するものであり、本書によるものではないことは申し添えたい。本書は選挙研究にとどまらず、政党政治史や地域政治史を今後検討する上で欠かせない一冊であり、より多くの方に読まれるべき一冊であると言える。

著者は高校教員を勤めながら本書を書き上げたという。いわば在野の身で仕事と研究を両立させ、このような優れた研究を書き上げた著者の努力に心から敬意を表したい。比べるのは失礼かもしれないが、同じく在野で研究を続ける評者にとつても大きな励みとなった。今後の著者の研究の更なる進展を願ってやまない。

#### 【註】

(1) 手塚雄太『近現代日本の政党支持基盤の形成と変容』(ミネルヴァ書房、二〇一七年)は近年の政治家をめぐる研究の中でも、一次史料を調査した上で政治家の後援会の実相を明らかにした優れた研究である。

(2) 源川真希『近現代日本の地域政治構造』(日本経済評論社、二〇〇一年)

四二頁―四三頁。

- (3) 杉谷直哉「島根県における憲政会・立憲民政党勢力の形成と展開」(『山陰研究』第一〇号、二〇一七年)八頁。なお、同論文一五頁において、一九二七年に政友会那賀郡部会が島田の後援会である硯堂会の発会式と同時に開かれているとしたが、その後の調査で正確には政友会那賀郡支部の発会式が一九二九年に開かれていることが判明したため訂正する(『山陰新聞』一九二九年一月二四日)。
- (4) 克堂会の詳細については杉谷前掲「島根県における憲政会・立憲民政党勢力の形成と展開」を参照。
- (5) 庄司俊作『日本の村落と主体形成』(日本経済評論社、二〇一二年)三八〇頁―三八五頁、同「課題と方法」庄司俊作編『年報村落社会研究五〇 市町村合併と村の再編』(農山漁村文化協会、二〇一四年)二七頁―三〇頁。
- (6) 『松陽新報』一九二七年七月二日夕刊。
- (7) 粟屋憲太郎『昭和の政党』(岩波書店、二〇〇七年)(初版は一九八三年)二〇五頁―二〇七頁、杉谷直哉『『地方メディア』の政党論』(『洛北史学』第二〇号、二〇一八年)、福岡良明「九州における地方紙の政治性」佐藤卓己・河崎吉紀編『近代日本のメディア議員』(創元社、二〇一八年)。
- (8) 杉谷直哉「政党政治家のイメージ形成について」(『山陰研究』第二二号、二〇一九年)。

(日本経済評論社、二〇一九年、六四〇〇円＋税)

(山陰研究センター客員研究員)